1. 色絵花文湯呑　千葉・我孫子　1918年　6.4×7.2cm
2. 鉄絵色差山水文陶板　セント・アイヴス　1952年　9.9×9.9cm
3. 染付彫絵樹下婦人図皿　東京・麻布　1919-20年　3.1×21.3cm
4. 鉄砂抜絵組合陶板衝立　虎（部分）セント・アイヴス　1946年
5. 楽焼葡萄文蓋付壺　東京・上野桜木町　1913年　25.6×24.3cm
6. 自画像（部分）　紙、エッチング　1914年
7. ガレナ釉筒描山羊文皿　セント・アイヴス　1952年　11.0×44.0cm
8. 緑釉駆兎文陶板　東京・麻布　1920年　28.5×26.7cm
9. 白掛櫛描色差皿　福岡・二川　1935年　9.0×50.5cm

1	2	3
4	5	6
7	8	9

開館時間：午前 10 時 ― 午後 5:00（入館は 16 時 30 分まで）
休 館 日：月曜日（ただし祝日の場合は開館し、翌日休館）
入 館 料：一般 1,000 円　大高生 500 円　中小生 200 円
交　　通：京王井の頭線駒場東大前駅西口から徒歩 7 分
所 在 地：〒 153-0041 東京都目黒区駒場 4 丁目 3 番 33 号
電話番号：03-3467-4527 番
西館公開日（旧柳宗悦邸）：
　会期中の第 2 水曜、第 2 土曜、第 3 水曜、第 3 土曜日（入館 16:00 迄）

http://www.mingeikan.or.jp/　日本民藝館

作陶 100 年記念

バーナード・リーチ展

2012年 6月19日(火) ― 8月26日(日)　日本民藝館

〔写真〕楽焼駆兎文皿（らくやきくともんさら）　千葉・我孫子　バーナード・リーチ　1919 年（大正 8）　6.9×33.8cm

Bernard Leach – Commemorating the 100th Anniversary of Leach's career as a potter

英国・ダーティントンホール
（国際工芸家会議会場）にて　1952年
左より柳宗悦、リーチ、濱田庄司

岩（軽井沢）
紙、墨　1918年　26.0 x 21.4 cm

大分・小鹿田窯で絵付をするリーチ　1954年

兎
紙、インク　1934年　30.0×41.6 cm

作陶100年記念　バーナード・リーチ展

バーナード・リーチ（1887-1979 年）は、陶磁器をはじめエッチング・素描・木工作品などを創作した、20 世紀英国を代表する工芸家です。香港で生まれたリーチは 3 歳まで日本で過ごし、10 歳になると母国での教育を受けるため英国に渡ります。美術学校で絵画を学び、小泉八雲やホイッスラーなどの影響を受け、日本への関心を抱きながら多感な青年期を過ごしました。

念願の再来日は 1909 年リーチ 22 歳の時。幸運にも雑誌『白樺』の同人を始めとする、当時の芸術家や文化人と知遇を得ます。中でも、白樺派の中心メンバーであった当館創設者・柳宗悦（1889-1961 年）との出会いは、その後のリーチの創作活動や思索に多大な影響をもたらしました。柳もリーチが唱える美の問題、実制作の課題から、大きな示唆を得ます。その後、柳たちが始動する民藝運動にもリーチは深くかかわっていきました。そして二人は生涯の友として互いを尊敬しあい、その友情を育んでいったのです。

1911 年、陶芸の道を志したリーチは六代尾形乾山から作陶を学びます。この焼物への傾倒は、友人であった富本憲吉（1886-1963）が陶芸家をめざす契機ともなりました。1920 年には濱田庄司（1894-1978）をともない帰英。セント・アイヴスに登窯を築き、作陶を開始します。爾来 1979 年に歿するまで、セント・アイヴスを拠点に旺盛な創作活動を続けました。

リーチの陶芸作品の特質はその陶画にあるといえますが、その美しさは 17 世紀の初期伊万里やオランダ陶器、そして英国のスリップウェアの絵付けに迫るといっても過言ではないでしょう。これは模様を生み出す力や、絵付けの力が脆弱になった現代から見れば奇跡のような出来事といえます。

そして、多くの窯場での創作もリーチ陶芸の特徴の一つです。英国ではセント・アイヴスのほかにダーティントン。日本では、その活動範囲は全国に広がり、各地の材料や手法を活かしながらも、個性溢れる造形を生み出しました。またリーチという美の求道者を目の当たりにした作り手や、現場で活動する民藝運動の担い手にも、計り知れない教示を与えたのです。

リーチは、英国人である自分と東アジア、とりわけ日本とのつながりのなかで、自作の理念を「東と西の結婚」に定めました。そして、自国での創作はもちろん、幼少期をあわせると 15 回に及ぶ来日を通して、それを実践していったのです。

2012 年はバーナード・リーチ生誕 125 年、作陶 100 年の記念すべき年に当たります。本展はリーチの最初期のエッチングから晩年の陶磁器作品まで、当館所蔵の優品約 170 点を一堂に展観し、リーチの芸術活動をあらためて顕彰するものです。

私たちは詩情にあふれ、自然で温かみのあるそれらの作品を通し、東と西を超えて到達した、バーナード・リーチの理念を今も体感することができるのです。

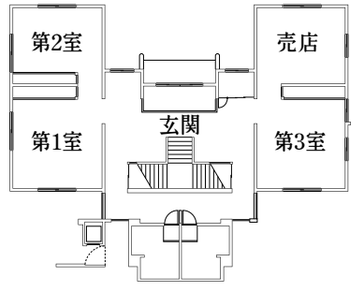
※巡回展　2013 年 9 月～ 11 月（予定）
豊田市民芸館（TEL. 0565-45-4039）

記念講演会　**バーナード・リーチ先生の思い出**

〔講師〕**別宮 美穂子**（日本民藝館評議員、鈴木大拙館名誉館長）

日時・8 月 18 日(土)　18:00 - 19:30　　会場・日本民藝館大展示室
料金・300 円（入館料別）　　定員・100 名（要予約）

展示室 1 階



〔玄関〕染付・色絵　―初期伊万里を中心に―

日本で最初の磁器は、江戸時代前半に肥前国有田で焼成され、積出港の名に因んで「伊万里」と呼ばれることになりました。本展示では、初々しい魅力の初期伊万里を中心に、まもなく登場した初期赤絵や古九谷様式などの色絵磁器を交え、日本の磁器の魅力を紹介します。

〔第 1 室〕日本の民窯

江戸後期を中心に日本各地の民窯で生産された陶器の造形は、民藝運動に携わった工芸作家たちに大きな影響を与えました。その魅力を、リーチが来日した際に作陶を行った二川（福岡）・布志名（島根）・小鹿田（大分）・益子（栃木）の民陶を交えて紹介します。

〔第 2 室〕硝子絵と世界の硝子

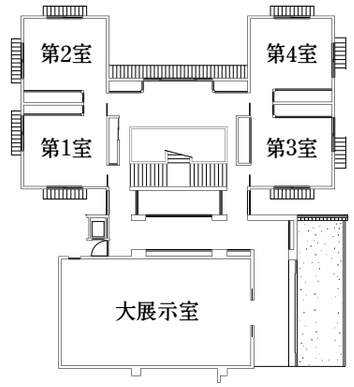
硝子絵とは板硝子に裏面から風景や人物を描いたもので、その技法は江戸時代前期に日本へ舶来されました。併せて展示する当館所蔵の硝子工芸は、日本をはじめ西洋やメキシコなどで作られたもので、瓶や鉢など実用を主とした品には、どれも共通して造形的な力があります。

〔第 3 室〕日本の絞り染

絞り染は、布を括ったり縫い締めたりして防染し、模様を染め出します。江戸から明治初期まで、さまざまな技法を用いた本藍の絞り染浴衣が日本各地で染められ、庶民に親しまれました。爽やかな藍染をはじめ、紫根や茜や紅花で染めた華やかな絞り染も展示します。

〔1 階玄関〕染付網目文壺　伊万里
江戸時代　17 世紀　高 12.7 cm

展示室 2 階



〔大展示室・特別展〕作陶 100 年記念　バーナード・リーチ展

〔第 1 室〕朝鮮時代の白磁と染付

白磁とは、白色の素地に透明釉を掛け高火度で焼成した磁器。一方、白磁を素地として呉須（コバルト顔料）を使って釉薬の下に文様を描いた染付磁器。楚々とした気品とおおらかさを併せ持った朝鮮白磁と染付の魅力を紹介します。

〔第 2 室〕濱田庄司の陶器

濱田庄司は、1918 年に初めてバーナード・リーチと出会って以来、1920 年からの 3 年にわたる渡英で親交を深め、セント・アイヴスのリーチ工房設立への協力や、それ以降の民藝運動での活動、作陶に関することなど、リーチと終生にわたり深い友情を育みました。本室では濱田庄司の陶器作品を紹介いたします。

〔第 3 室〕初期、中期のバーナード・リーチ作品

再来日（1909 年）以前のエッチングを始め、楽焼や陶磁器・絵画など、1920 年に帰英するまでの初期作品を、特別展に併せ展示します。この時期の作品は技術的には拙い部分もありますが、既にリーチ芸術の魅力を十分にそなえています。中期（1945 年まで）の作品と共にご堪能下さい。

〔第 4 室〕日本の木彫

民間信仰で用いられた彫像類や三重塔、奉納用の神馬や面、囲炉裏で用いられた自在掛や横木、仏教版画の版木など、江戸時代に造られた日本の木彫類の数々を紹介します。素朴で力強い民間の造形美をご覧下さい。

〔2 階第 4 室〕神馬像
木造　室町時代　16 世紀　像高 72.0cm